

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名：森田数実

本論文は、M.ホルクハイマーの思想における40年代の「転回」とアドルノとの「亀裂」の問題について、その思想の形成展開の軌跡を辿りながら統一的に解釈する試みを提示したものである。『啓蒙の弁証法』の「主体のうちでの自然の想起」という視座を通じての理性と自然との宥和の試みについては、G.シュミート・ネアによって、アドルノの「自然史の理念」に注目した批判的解読がすでに示されている。本論文はその成果を踏まえつつも、むしろホルクハイマーの執筆部分とされる「ジュリエット」の章に焦点をあて、そこには、外的な知覚世界への優しさと豊かさからなる第一次的コミュニケーションの、第二次的コミュニケーションとしての哲学的概念・言語への翻訳という「自然の言語化」の視点を通じて、科学的言語・思考と道徳的感情との矛盾と分裂の認識およびその言語化が、一つの宥和の回復への兆候を孕むことを取り出そうとする試みが示されているという、独自の解釈を提示するものである。

本文は全8章からなる。序章で問題提起を行ったあと、第一章は、初期の手記における市民社会の現実に対する批判と、そこで生きる人々の苦しみへの同情というホルクハイマーの人間学的関心を確認する。第二章では、一連の認識論的研究を中心に批判的理論の構成を検討し、それが、専門科学の諸成果に理性的な社会への関心に基づく限定的否定を加えながらも、全体の理論へと組み入れて現実を実践的に再構成するものであることを指摘し、そこでは、たとえば同情という心的態度・感情は市民社会の中で個々人の運命の無意味さと結びつけられることで、批判に規範的方向を指示するものとして肯定的に捉え直されていることを明らかにする。第三章と第四章は、30年代の「権威と家族」に関する研究、「モンテーニュと懐疑の機能」、「エゴイズムと自由を求める運動」など、一連の人間学的研究の検討を中心に、市民文化および市民的人間の質の分析を解明している。以上を踏まえて、第五章と第六章では『啓蒙の弁証法』における「主体のうちでの自然の想起」という新たな合理性概念に関し、シュミート・ネアの論考を参照しつつも、著者独自にホルクハイマーとアドルノとの違いに着目し、スローターダイクのニーチェ研究とアドルノの思考の基礎となっているベンヤミンの言語哲学についてのメニングハウスの研究とを検討した後、ホルクハイマーの視点を身体・知覚の言語への「翻訳」関係に基礎を置くものと分析し、そこに道徳的感情の苦しみに言葉を与え表現へともたらずことにより、「啓蒙」と「自然」との和解へむけて歩みを進めようとするホルクハイマー思想の新たな展開の試みが見いだされると結論する。終章は、本論文の全体を振り返り、その成果をまとめている。

本論文は、ホルクハイマー思想の生成と展開を、丹念・周到なオリジナルテキストの徹底した読みと、重要な二次的文献の検討に支えられて独自の視点で解読したものであり、この分野の研究を大いに進展させたものとして高く評価することができる。よって本審査委員会は、本論文が博士(社会学)の学位を授与するに値するとの結論を得た。